

# 家庭と教室を繋ぐために教師ができること

— 教材作成の工夫に焦点を当てて —

横矢 恵里<sup>1</sup>

<sup>1</sup>(大阪市立東中学校)

家近 早苗<sup>2</sup>

<sup>2</sup>(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科)

**1 問題** 昨年度より、2度にわたり全国で新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、緊急事態宣言が表明され、大阪市の公立学校は休業措置が取られ、生徒は授業に参加できず、昨年度はおおよそ2か月間授業を受けることができていない状況であった。令和2年4月には、文部科学省から「臨時休業期間中の学習指導について家庭学習を課すこと、電話等による状況把握をすること、家庭学習を適切に評価すること」など基本的考え方の通知があった。令和2年6月には、「新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の『学びの保障』総合対策パッケージ」により「学校が課す家庭学習と、教師によるきめ細かな指導・状況把握により、子供たちの学習の継続等を徹底すること」が通知され、場所としての学校を中心とした学習ではなく、授業を家庭と教室で繋げていくことの重要性が高まった。本研究では、家庭と教室を繋ぐことを意識し、作成した教材を使うことで、家庭学習と学校の授業での学習の循環を促すことができるのではないかと仮定している。

**2 目的** 生徒が自分の学習を振り返り次に生かす情報を引き出す活動である「教訓帰納」は、学習成果や学習意欲を高めることに有効である(植阪,2010)ことから、短時間の登校でも生徒が自宅学習と授業とを往復しつつ理解できるような授業教材を検討することが研究の目的である。

**3 方法** 期間:2020年4月から2020年8月

対象者:大阪市内A中学校の1年生3クラス(78名)

方法: 第一発表者の理科の授業で、スクロウの条件的知識(Schraw,1998)を参考に教材を軸とした授業計画を組み、家庭での予習、学校での学習、授業後の復習のための教材を作成する。授業アンケートから、生徒がどのような視点で報告者の教材に取組んだのかを整理する。

教材を軸とした生徒の活動(図1)について、一点目に、家庭での予習を行う。教科書をベースとした読みの段階で、小学校の振り返りや新しい理科の用語を見ていく。1回目の本読みでは、分からない言葉に赤線を引きながら、文字を声に出して読んでいく。2回目の本読みでは、予習教材(図2)を用いて理科の用語の確認を行う。このとき、自分が知っている知識や、知らないことが何かについて考え、意味を調べ確認する。小学校の頃の学習との結びつきや、単元ごとのまとめ、違いについて整理していく。

二点目に、学校での学習を行う。小テスト(図3)で理科の用語を確認し、主要な用語を関係づけていく。単元の主題を理解するため、生徒が科学的な思考を引き出しながら説明できるよう発問する。ペアやグループでできる教材を用いて比較したり、分類したり、これまで学んだことや日常生活との関連性について考える。また、既知知識の関わりを振り返り、三点目の家庭での復習に繋げる。

家庭での復習では、予習の教材と学校で使った教材を見返すことで、単元のまとめに、これまでの学習で「何が分かるようになったか」や「将来このようなことに活かせるのではないか」に発展する教材を使う。授業中の発言やアイデアを積極的に理科通信(図4)に掲載し、教師が総合的な振り返りを行う。

1学期末(8月)に、質問項目を「今学期どのような授業が一番理解できましたか」「今学期一番楽しかった授業は何ですか」として自由記述でアンケートを行う。アンケートを読み込み、教材について書かれているものを整理する。



図2 予習プリント



図3 小テスト



図4 理科通信

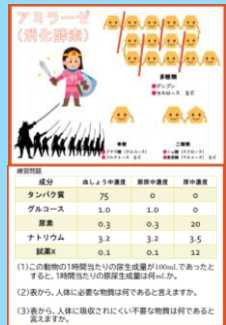


図5 授業スライド

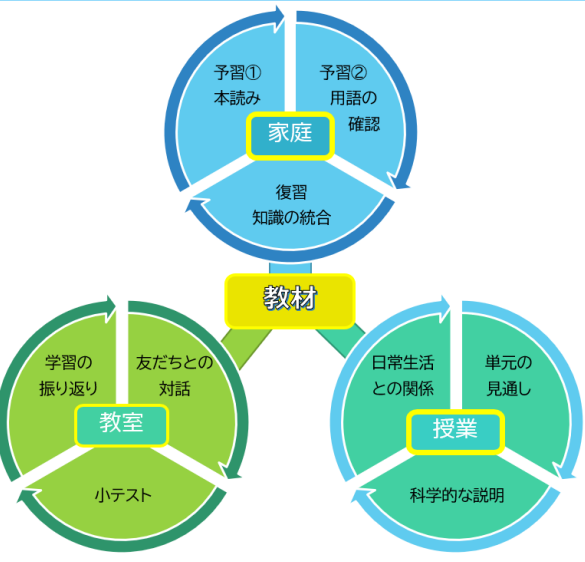


図1 教材を軸とした生徒の活動

**4 結果** 授業では教室で使う教材として、板書や授業スライド(図5)を用意した。授業の導入時に「どうして?」を引き出すことで、授業がおもしろくなることを生徒に期待させ、中盤で「なるほど!」に変わること、終盤に向けて教科書の内容や単元が理解できるように、授業の山場となる場面を意識して授業を行った。教室の中で友だちとの対話が広がり、小テストで確認した用語を使って、授業に入れるよう単元全体の見直しをもった。発問では生徒を励ます言葉かけや基本的な授業スキルを育てることを意識して発問した。振り返りシートを毎回点検し、生徒主体の疑問を発問に紐込むようにした。家庭や教室を越えて、日常生活に授業が関係していることを生徒に伝えた。授業理科通信も教材の一つとして、知識の統合に役立つよう手立てした。

アンケートでは、教材について「(一部)抜粋小テストや予習をした事。毎回授業前予習をしてくることでより授業を理解できたり、予習の大切さを知れた。他の教科も予習するようになった。小テストをすることで100点をとるためにめっちゃ勉強するようになったし、まちがった所を知れて、テストのときにとても役に立った」など、授業スキルの教授や家庭学習の促進についての記述があった。①予習や小テスト、②授業スライドや板書、③実験・観察、④振り返り、⑤教科通信、⑥教師の教授、⑦①~⑥の複数、⑧学校で与えられた以外の教材、8つのカテゴリーにそれぞれ書かれている内容を整理した。

**5 考察** 教師が教材を軸に家庭と教室を授業で繋ぐためには、用語の確認や小テスト、説明をさせる教材を使って、すべての生徒が基本的な学習スキルを身に付けられるユニバーサル型の教室環境をつくるのが重要であると考えた。教師が教材を与えるだけでなく、家庭学習が進んでいない生徒を机回し巡視等で点検し、何があげられるのか、どうすればできるのかを指示するところから次の家庭学習が始まる。生徒が、日常生活と授業の繋がりに気づくことで、次の家庭学習を進められるのではないかと。習得と活用サイクル(市川,2014)が教室と家庭、授業において、教材を軸として繋がっていくことが明らかになった。予習をすることが授業内容の理解を促し、さらに難しい問題に挑戦できると考えている生徒もいれば、予習が次の小テストの点数向上に役立つと考えている生徒もいる。いずれにせよ、予習教材が生徒の学習の動機づけになる可能性があるといえる。復習の教材を使うことで、これまでの知識を統合させ、科学的な説明に必要な情報を選ぶことができるようになる。物事を順序立てて考えることができるとともに、教材を使って、他の人とのコミュニケーションを促進することもできるのではないかと考えられる。

\* 本研究は大阪教育大学大学院連合教職実践研究科における実践研究をもとにしています。